

平成30年3月1日（木）
定時制生徒会誌「僚星」巻頭言

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

未来へとよりよく生きる力

ある全国紙の読者の欄に掲載されていた、千葉県在住の女性と思われる方の投稿です。現在、定時制課程を卒業した19歳の看護学生です。

私は、中学生の時に父と兄を亡くした。少しでも家計を支えたいと思い、アルバイトをしながら勉強できる定時制高校に入った。

1年生の4月から、飲食店でアルバイトを始めた。当初は、あいさつができていない、声が小さい、手際が悪いなど、本当に怒られてばかりだった。その頃は、全くやる気が無く、「こんなところさっさと辞めてやる」と思いながら、ダラダラと続けていた。

数カ月たって、仕事にも慣れたある日、パートの人から「最近、頑張っているね」と声を掛けられた。その日からやる気を持って仕事をするようになった。「笑顔が良い」と褒められることも増えた。

それと同時に、私は少しだけ家族の死を乗り越えた気がする。もちろん今も悲しみはあるが、前ほどクヨクヨと悩むことはなくなり、前向きになった。アルバイトは私の生き方を変えてくれたのだと思う。

毎日新聞「みんなの広場」2017.6.13

中学生の時に父と兄を亡くした詳しい事情は書かれていません。それは、「少しだけ家族の死を乗り越えた気」にはなれても、今も悲しみは続いているからです。父と兄を失った深い喪失感や人生の不条理感に襲われる時があることが分かります。家族構成もはっきりしません。「少しでも家計を支えたいと思い、アルバイトを」するのですから、弟や妹がいて母を助けているのかもしれませんが。家族の悲しみはもちろん、母の苦勞、幼い兄弟の不安など、家族の事情がよく分かるから、「アルバイトをしながら勉強できる定時制高校に入った」のでしょう。中学生で背負わなければならない困難も、屈託のない同年代の高校生たちを見ると、自分の境遇を一層つらく感じさせたはずですが、しかも、自分が遭遇した理不尽さは周囲に理解してもらえない。それなのに、アルバイトでは「本当によく怒られてばかり」です。授業では時々、悲しみ、苦しみ、つらさ、疲れによって、すべてを投げ出したくなることがあったはずですが、しかし、将来の夢である看護師を目指し、勉学に励んだことが分かります。「少しでも」、「少しだけ」という言葉に象徴されるように、彼女は少しずつ逆境を乗り越え、自身の成長とともに未来を切り拓いています。

どうして、彼女は人生の試練ともいえる逆境を乗り越えるのでしょうか。現実には挫けず、夢に一歩ずつ近づいていく力は、どこから生まれるのでしょうか。社会学では、他者の前でする試行錯誤で得た承認が、尊厳（自己価値）を生み、それが力になって、もっと広い世界に踏み出せると考えます。つまり、「試行錯誤の自由」→「他者が認める承認」→「失敗しても大丈夫という尊厳」の循環で、人は社会的に成長していくということです。父や母が、幼い頃から彼女にそんな力の芽を育ててきたのかもしれませんが。パートの人に象徴される周囲の人々から認められ、励まされることも力になったのでしょう。彼女の投稿は、人のもつ「未来へとよりよく生きる力」を教えてください。人の痛みがよく分かり、逆境にあっても学び続けた彼女は、きっと素敵な看護師になるはずですが、彼女の未来に幸あれ。